

群読「あたらしい憲法のはなし」をステージ発表して
よりみちカフェ「憲法ははじめの一步」



★私たち「憲法ははじめの一步」は毎年、憲法の条文の中で好きなものを可視化する、シール投票と私たちの思いを込めた憲法の本の展示をしています。それに加えて、今年は「あたらしい憲法のはなし」をステージで発表をすることになりました。

1.「あたらしい憲法のはなし」とは何か？

「あたらしい憲法のはなし」は、1947年8月2日に当時の文部省が中学一年生用教材として発行したものです。戦後の日本人が戦争に負け甚大な被害を受け、もう戦争は嫌だという気持ちでいた時代に、平和を求めそれを築いていく人々、こどもたちを国が育てようとしていた証がこの本にあると思います。

2.群読発表のためのワークショップ

「憲法ははじめの一步」は、“憲法”を入口に、社会のことや自分たちが知りたいことを市民が自由に学んでいる時間です。演じることなどはもちろん経験がない私たちですので、ステージ発表には高いハードルがありました。そこで、今年三月の定例会で、群読へのアプローチとして、「青年劇場」の俳優・八代名菜子さんに指導を兼ねたワークショップを開催していただきました。

疑似劇団員という感じで、ストレッチから発声のポイント、伝えるための表情、眼差しなど技術的な学びがたくさんあり、さらに台本の文を一つ一つメンバーで吟味し、伝えたいポイントや意味を語り合う時間が非常に大切なプロセスでした。

台本には各自好きな色のカバーをかけ、思い思いの居心地の良い服装で発表しようということも決まっていきました。

3.「あたらしい憲法のはなし」という小さな本の販売

群読の発表だけでなく、この本が存在したことや内容(憲法について広くこどもたちに知らせたいという理念)の素晴らしさを一人でも多くの人に知らせたいよねと話し合い、販売も実施することになりました。

出版社の童話屋へ問い合わせ、ピースフェアでの販売が可能であるとの確認の上、32冊の冊子を購入し、期間内に受付にて販売。また、私たちの展示ブースと受付に冊子販売の案内POPを手作りして配置し、来場者に知らせることにしました。

1冊300円で期間内に18冊売れました。特に私たちの群読のあった17日に10冊売れたのは、嬉しいことでした。

4.当日のステージ発表にまつわること

予定していたメンバーも、様々な理由で当日残念ながら出られず、8人でステージへ。

12時にリハーサル実施。並び位置や入退場の確認。ステージへの椅子配置の確認(2脚)。

1回の読み合わせ。その時、「自分以外のパートでは顔を上げ客席を見よう」とメンバーの中から提案があり、この気づきが緊張をほぐしてくれました。

素晴らしい台本があり、憲法のエッセンスをステージで仲間と発表できたことは、とても楽しく貴重な経験となりました。緊張の中でも案外観客の顔もよく見えたし、「きぼーる」の吹き抜けの素敵な巨大空間を楽しむ余裕もありました。二階テラスの所からステージに注目してくれている人も見えたのがとても嬉しく感動しました。

鳥肌が立つような時間だったので、また仲間たちと他の場所でも、ささやかに「あたらしい憲法のはなし」を人々に伝えることができたらいいなと思っています。

観客の方々へ、「発行当時の中学一年生になったつもりでお聞きください」と伝えました。

また、群読の終了後には、「今私たちが日本国憲法を持っていることを誇りに思います。今を生きる多くの人たちにもぜひ知ってもらいたいです」と閉めました。

併せて、青年劇場と俳優の八代さんへの感謝を伝え、司会者が八代さんにマイクを渡して下さり、感想とメッセージをいただきました。

5.最後に

戦争の歴史を知ること、想像すること、考えることは今の私たちに非常に必要なことで、ピースフェアに溢れている戦争体験にまつわる記憶や声に触れられることは、価値のあることです。それらを土台にして未来をどう平和にしていくかを私たちが考え続けたいといけなと思います。平和はなにもしなくても、なにも考えなくてもそこにあるものではないからです。

「あたらしい憲法のはなし」が復刊されて本当に良かったと思います。憲法を生かして民主主義を作っていこうという思いが、戦後すぐにあったのだということも、知られなさすぎだったのだから。この本を知り、読んでみたら、次はこれを知らせる側に回りましょう。

そのひとつの小さな手段として、群読というやり方でピースフェアに参加できて心から感謝しています。

(高津佐佳子)

★私たちが群読「あたらしい憲法のはなし」を「ピースフェア」のステージで実現するまでには、2年半の道のりがありました。

「青年劇場」のピースリーディング「平和へのメッセージ」で、群読「あたらしい憲法のはなし」を聴いたのは、2020年11月のことでした。

コロナウィルスの感染が拡大し、先の見通しが立たず、さまざまなものが自粛傾向にある中で諦めていたときに、「戦後75年の節目にこそ上演してほしい。実現のために何かお手伝いできることがあったらおっしゃってください」というあるお客さんの応援メッセージを受けて、開催を決めたそうです。

そのトリを飾った群読「あたらしい憲法のはなし」は、当日の出演者全員によるものでしたが、そういう時だからこそ戦争の愚かさ・不条理さ、そして平和な時代の尊さを伝えようと立ち上がった俳優さんたちの想いのこもった台詞一つひとつに心動かされる素晴らしい舞台でした。後から聞くところによれば、俳優さんたちは稽古の時も本番の日も、自費でPCR検査をしてのぞまれたとのこと、舞台に立つことも並大抵のことではなかったのです。

実は、私たちが学習会を始めたのは2015年12月のことでしたが、「あたらしい憲法のはなし」をテキストとし、高橋高子弁護士を講師に迎え、一年をかけて「日本国憲法」を学んできました。まさに「あたらしい憲法のはなし」は私たちにとっての“憲法はじめての一步”だったのです。そんな私たちが、この群読を「ピースフェア」でやれたら、なんて素敵なことだろうと、その時、ぴんときてしまったのです。

その年の暮れには、毎年恒例の「来年は何をやりたいか」をみんなで話し合う場で、私は迷わず提案しました。以前よりお付き合いのあった青年劇場の俳優・八代名菜子さんにワークショップをお願いして、その次の年の「ピースフェア」でやることが決まったのです。同時に、脚本を書かれた「青年劇場」の演出家・福山啓子さんに使わせていただくことを快くお許しいただき、夢のようでした。

八代さんとはその後、オンラインでワークショップの打合せもし、本番に向け準備万端だったのですが、結局2021年6月の時点でコロナの収束は見られず、「ピースフェア」もまん延防止等重点措置が取られる中での開催となりました。ステージ発表は2名までと限られ、私たちは群読発表を諦めざるを得なかったのです。

それから2年経った今年、「ピースフェア」ではステージ発表も例年通り実施できることになり、再びチャンスをいただいたのです。八代さんにはようやく発表の時が訪れたことを報告すると喜んでくださり、3月「憲法はじめての一步」で初めての「朗読ワークショップ」をやっていただきました。参加者ほぼ全員がみんなで発表しようと心が一つになったのは、本当に嬉しいことでした。ワークショップを通し、私たちの背中を押してくださった八代さんのおかげです。

私はその後、母の入院、2度の手術が重なり、準備の方は高津佐さんをリーダーとしみなさんにお任せし、練習にも参加できず当日を迎えました。応援にかけつけてくださった八代さんに見守っていただく中で、そのステージに仲間と一緒に立ち、素敵な体験ができたことには、感謝の気持ちでいっぱいです。

誰もがコロナウィルスに悩まされた時期でしたが、2年半という時間をかけて、たくさんの方にご協力いただき、困難を乗り越えみなさんの想いがつながって実現したからこそ、価値ある発表になったと誇らしく思っています。



(北川直実)

*2つの挿絵は「あたらしい憲法のはなし」